近代知性で捉えきれない世界を鳥瞰する

堀池 信夫

†

「道教とは「道」の教えである」、というのが本書の冒頭に置かれた「道教」の定義である。この定義は惹句として本書の腰巻きにも使われているから、いわば本書の「へそ」となるアイデアといってよいだろう。だがこの定義はトートロジーになっているから、それ自体は論理学的には誤謬であって、無効な定義である。

ところで近代以降一般に、学問や研究というものは知的・分析的・論理的、つまり合理的であることが必須の条件とされてきた（これは現在でも、また未来においても、「学問」であるかぎりそうでなければならない）。それゆえかつての日本の道教研究も、その必須条件の上に乗って行われなければ価値も意味もないと考えられてきた。きっちりとした概念定義、緻密な文献分析により、道教の歴史的・思想的展開・経緯の再構成が進められ、日本の道教研究の知見はめざましい展開をとげた（そしてこの方向での研究の余地はまだまだ大きく、さらに進展させられなければならない）。ところが……

もう一方で、道教についての知見が深まれば深まるほど、どうも道教というものは分析的知性によっては取りこぼしてしまうところ、または泥沼ズブズブになってしまいそうなところが多いことも分かってきてしまった。さらには、道教に対する緻密な概念規定、精密な分析結果によって導出された理論の厳密性・緻密性が徹底すればするほど、その理論・定説への反論不可能性が増大してゆき、現前している事実（あるいは文献）を定説の方に引き寄せて解釈するというような傾向が肥大化し、そしてそうである研究のほうが学問的評価が高いという、知の逆転現象とでもいうべき事態も起こってきてしまった（そうなると、評価する側の価値観も大きな問題となってくるわけだが）。

ともあれそうした次第で道教は、どうも今日のわれわれのもっている普通の近代的知性という武器をもって取っかかっても、深い罠を準備して待ち構えているような気がするものとなってしまった。本書は六章構成になっているが、その第六章の章題は「十中八九でたらめでも」というものである。これは顧頡剛の「道蔵に書いてあることの十中八九はでたら

菊地章太著
道教の世界

四六判　200頁
講談社［1575円］

めだ。しかし中国人の信仰を理解しようとするならばそれは無尽蔵の宝庫である」との言葉による章題なのであるが、これは近代知性にとって道教がいかに、もやもやどろどろの、つかみにくい対象であるかをうまく表している。

であるからして、「道教とは道の教えである」という定義は、論理学的に誤謬であろうがなかろうが、というよりも誤謬であるからこそ、もしかすると道教というものを分かるための風穴を開けるテコになりそうな気もするのである。

で、本書に記されていることがらは基本的には、近代的学問研究によって今日までに切り開かれ達成された知見にもとづいている（本書の著者もその一角を担ってきた）。

……のであるが、近代的道教研究の成果はきわめて知性的な成果であり（身体論のような反知性的に見えるものもじつは知性的理解の一変奏である）、また道教自体がもつ多様な相貌のゆえに、非常に幅広く多岐にわたってしまった。そのためまずはそれを見通して手際よくまとめるというのは至難なことである。加えてそれをコンパクトに仕上げるというのも相当な腕前を要する。

本書はそういった道教への鳥観を与える書として有意義であり、著者の腕前がなかなかのものであることを納得させる。またその説明の文章は非常に分かりやすい。著者は「単純に理解することがつねに最善とはかぎらない。それでも手みじかに知りたいという怠慢な欲求はいつもある」と、分かりやすさということには欠落するものがあるという危険を承知の上で、あえてその道を選んだ。これは一つの覚悟である。著者が、研究という営為の中に盲目的に漬かり込むのではなく、一歩離れて突き放し、ものごとを大きく俯瞰する眼をもっているということを示している。このことは「道教とは道の教えである」などという思い切りのよい（といおうか、相当ずうずうしい）定義を平然と行う度胸とパラレルであろう。もう少しいえば、近代的学問の理念・近代的学問の方法というものを充分に承知しつつも、そこに留まらないもう一歩

大上正美著
六朝文学が要請する視座
曹植・陶淵明・庾信　過酷な政治情況の中で生と表現の危機を引き受けながら表現された六朝文学への犀利な考究。　5040円
《目次抄》曹植の仮構と対自性　仮構の力／曹植の対自性　陶淵明小論　思想空間としての詩／言志の文学／陶淵明への文学的視座　庾信論覚え書き　六朝文学から〈文学〉を考える　美は現実をきりひらくか／ふたりの武帝と表現者たち／中国古典文学の「言志」と〈毒〉

石川忠久著
江都晴景　わが心の詩
石川忠久八秩記念漢詩選集　折々に詠われた詩を六つのテーマに分け、作者自身による解説・訓読・語釈を付した自選集。3675円

▼好評既刊
茶をうたう詩　『詠茶詩録』詳解　8925円
石川忠久著作選　全5巻別巻1／既刊3　各3300円
Ⅱ長安の春秋　Ⅲ東海の風雅　Ⅳ岳堂　詩の旅

研文出版
東京・神田神保町2-7　☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/

進んだ視線の獲得という姿勢を、暗に示すものと想像できる（そうではない可能性もなくはない）。

†

本書は先にも述べたように、六つの章からなる。

第一章は「しいたげられた心の救い」と題して、話しは道教以前、老子から始まる。老子の「道」は低きにある。社会の中で底の底にまで追いやられても、現実を見すえつづけ、その先に光を見る。もっとも底辺にあるからこそいつまでも命を永らえることができる。命をいつくしむがゆえに不老長生をめざし、ひとびとの心の中にある痛みを救済する。そうした「道」の思想は漢代末期の動乱を通じて、その思想を信奉する人々を増加させ、やがて教義と教団を備える存在となってゆく。が、著者は、道教はそのような狭義のものにはとどまらない、民間信仰や民俗信仰をも視野に入れるべきことを説き、丸山宏の、中国社会では社会から分離して輪郭を際立たせた宗教組織は存在しにくく、もっと別の幅広い原理の存在を見ようとする説を引く。

第二章「転変する世界の肯定」は、道教が教団・教理を形成してゆく時期、その際の内的・外的モチベーションについて解説される。漢末動乱期の信仰形態、そこに示された天人相関と勧善懲悪、積善余慶、天地再生の宗教理論、行われていた儀礼と読誦された経典等々も説明される。やがてその中にあって『老子』が重視されてゆくことになり、さらに老子という人物が神格化されてゆく。救済はそうした中にあって経典読誦・呪文の唱和を通じてなされるものとなってゆく。読誦は仏典漢訳以前からの、一つの救済の在り方であった。それはその後の東アジアに流れる（仏教の読経を含めて）信心の形態の一パターンとなって、今日も引き続いている。

第三章は「その喧噪のただなかで」と題する。山岳信仰・仙人・女神等々、道教信仰の諸要素の概説である。泰山や五岳の聖地、聖なる山中での修行、そして山中に住み、天にもっとも近い山巓から天空を飛翔し遊行する仙人、などなどのことが述べられる。この章の最後は、女神についてである。泰山の碧霞元君、送生娘々、その他多くの女神たち。著者はそこに人間の罪を罰する父に対して罪を許す聖母マリアのイメージを重ね見ようとしているが、これはミスディレクションである。むしろその本質はおそらく、著者が事例をいくつかあげているように、子授け・子育ての母神であろう。道教といえども儒教社会に生きる人々にとっては、血脈の断絶は生命の断絶とほぼ同等だったはずだからである。

第四章は「陰気が陽気を犯すとき」として、古代神話からはじまるお化けや幽霊の話のオンパレードである。中心になるのは『剪灯新話』の「牡丹灯記」の、幽霊女との交情で命を失ってしまう男の話である。円朝の怪談「牡丹灯籠」のおおもとネタである。この話は、最終的に道士が出てきて結末をつけるのであるが、中国のこうした幽霊話はだいたい道士が出てきてケリをつける。道教文学の類型といってよいのだろうが、そういった道士はもはや教団や教理にかかわると

いうよりもほとんど民間呪術師である。以前流行ったキョンシー映画で、キョンシーを引き連れた行進したり、キョンシーを成敗したのもこうした道士であって、最近ではアニメやゲームにも普及してきてしまっている。道教はもう道教とは意識されずに染み渡っているのである。そしてこの章のラスト部分は習慣化してしまった事象をいくつか取り上げるが、その中に、仏教の盂蘭盆会と習合した中元普度がある。祀り手のいない孤独な亡魂に供物を捧げて慰撫・救済しようとの、いってみれば施餓鬼の道教版である。これが日本の夏のお中元のルーツである。

第五章は「体の中は虫だらけ」と称する。「かんの虫」「腹の虫」にはじまり、体の中に住み込んでいるさまざまな悪い虫たち。虫は庚申の夜に天帝のところに行ってその人の罪科を告げ口するから、行かせないようにその夜は眠らない「庚申待ち」。虫は体に悪さをするから、虫をやっつける呪法から（京都八坂神社庚申堂の厄除けコンニャクもそういった呪法である）、医薬学もそれにつれて発達する。とりわけ中国医学の技術的発達（主に薬方）が不老長生をめざす道教と深くかかわっていたことが説かれる。ついで庚申問題を軸として道教の日本伝播の諸問題を論ずる。そしてさらに窪徳忠の庚申研究・沖縄研究に触れることを契機に、道教や仏教どころか、中国も日本も越えて、その根底にアジア全域に伏流する基層的な文化形態が存在する可能性をも示唆する。

第六章「十中八九でたらめでも」は先にもちょっと触れた。この章は、近代のアジア研究の学問形成に向けて活躍した中国学者あるいは道教学者へのオマージュである。彼らの仕事がなければ、著者も筆者も、現在の研究者はすべて、ない。われわれは今、もしかしたら近代の学問はじつは、「近代」による浸食、という弱点があるかもしれないと気づきはじめてはいるが、それでも彼ら近代の学問を作り上げてきた中国学者・道教学者たちへの尊敬は失ってはならない。そういう章である。その通りである。

†

「道教は道の教えである」という定義（ともいえない定義）から出発して描かれた「道教の世界」は、従来だったら道教とはいえないような世界をもじつは道教の世界と関連するものと、とらえ込んでしまった。そしてそのとらえ込みは、不当なものではないと思う。おそらく、できるだけ平易に分かりやすくという編集者の要望があったのだろうが、口調だけは平易に分かりやすくして編集者の意向に沿いつつ、ほとんど閾値を見出しがたい輻輳した事態を、このような形でまとめ込んでしまった著者の腕前には端倪すべからざるものがあるのである。

（ほりいけ・のぶお　筑波大学名誉教授）

＊